

実習報告（基盤教育実習）

## 児童の協働性を活かした授業実践の検討 －協働的な学びの現状と課題－

古賀 萌子（授業実践探究コース）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

平成27年8月、教育課程企画特別部会より、新学習指導要領の方向性を示す論点整理が出された。そこでは2030年の未来を見据え、予測不能な変動の激しい社会を生きる子どもたちのために、学校教育は何ができるのかと、改めて「学校」の意義を捉えなおす必要があると訴えている。今日、情報化の進展により様々な学び方が存在しているが、学校ならではの学びの一つに「多様な学習者同士で行われる協働的な学び」があると考えられる。学校は、能力も価値観も異なる者たちが学び合い、助け合い、時に対立しすれ違う経験を通して成長することができる場である。そのような協働性を活かした学びとして、同論点整理では「対話的」学びが示されている。「対話的」は「主体的」や「深い学び」と並ぶ、アクティブ・ラーニングの要素の一つでもある。本実習は、以前から比較的アクティブ・ラーニングの視点に立った授業が実践されてきたとされる小学校で行う。そこで、2年間を通した研究テーマである「児童の協働性を活かした授業づくり」のもと、探究実習のテーマを「児童の協働性を活かした授業実践の検討－協働的な学びの現状と課題－」と定めることとした。実習校で行われている協働的（対話的）な学びの現状を分析し、成果や課題を見出すことで、来年度の学校課題探究実習における授業実践に繋げていきたいと考える。

### 【探究実習の研究目標】

#### ①協働的な学習場面がみられる授業実践の分析

児童側の主体性を尊重することは協働的な学びにおいて欠かせないが、小学校においては発達段階等を踏まえ、すべてを児童の自立性に任せることは難しい。ある程度の教師の介入（指導）が必要となるのが、小学校における協働的な学習場面だと考えられる。そこで、教師と児童、児童同士の相互作用を意識しながら授業を参観することを通して、発問・机間指導といった教師の関わり方や、グループ・ペア学習における児童の学びの実態を分析し、授業づくりに向けた研究の視点とする。参観は学年、教科にこだわることなく行うこととする。

#### ②協働的な学びを通して目指す、児童の姿の確立

研究目標①と並行して取り組むこととする。来年度の授業実践に向け、協働的な学びを通してどのような児童を育成していきたいのかを明確にする。

#### ③児童の協働性を活かした授業づくり

研究目標①・②を達成した後に取り組むこととする。実習校における課題や目指す児童の姿を踏まえて、配属学級の担任の指導を受けながら取り組みたいと考える。

### 【探究実習の概要】

佐賀県の公立A小学校において、平成28年10月から約半年間、週に一度の頻度で実習を行った。A小学校は800名近くの児童が在籍する大規模校である。他者との関わり合いを尊重した教育目標が掲げられ、校内研究でも意見交換や説明し合うといった、児童の協働的な学習場面を設けた授業づくり

が薦められている。基本的には配属された1年A組において指導等を行い、担任のA教諭から助言を受ける形で実習を行った。学校内で校外学習の引率やT2等が必要とされた際は、その学級において実習を行い、他学年・他学級の実態把握に努めた。

また、月に一度のリフレクションでは、実習校のメンター教諭とA教諭、大学院の担当教員を交え、実習や研究の進捗状況を共有し、計画の調整等を行った。さらに、月末には全実習生、担当教員が集うカンファレンスが開かれた。そこでは実習における成果と課題、今後の計画、困難や不明な点を柱として、様々な校種の実習生同士で忌憚のない意見交換を行った。

### 【探究実習の成果と課題】

実習の大半を1年A組で過ごしたことにより、A教諭の指導と、それに応えてきたA組の児童の成長を間近で見取ることができた。1年A組は、授業場面において教師と児童、児童同士の対話が盛んに行われ、児童自身が「友達と一緒に学ぶこと」を大切にしている学級である。その背景にはA教諭の「友達と一緒に学ぶこと」を意味づけてきた学級経営があると考えられる。A教諭は日常的に「友達と一緒に学ぶこと」の意味を考えさせたり教えたりする場面を設け、そのたびに児童の言葉で答えさせ、共有を図っていた。2月現在、1年A組の授業を参観すると、教師が率いすぎること、特定の児童だけで進めることもない、学級全体で授業を作り上げているという印象を受ける。そこで中心となっているのが対話である。児童は教師の発言はもちろん、他の児童の発言もよく聞き、時には「お助け！」という言葉と共に内容の訂正や付け加えを行う。また、ペア学習の後は「二人で考えた」と手をつないで挙手をしたり、児童のノートには友達の言動や作品を意識した感想が見受けられたりする。そんな授業の光景は、協働性を尊重しながらも、個の時間を尊重し、児童の実態や教室のあたたまり具合を見極めて必要な手立てを講じてきたA教諭の指導力から生まれたものであったと考えられる。

1年A組の実態とA教諭の指導、そして他学年の授業の参観等を経て、主に二つのことが見えてきた。第一に、協働的な学習場面がみられる授業実践には、児童が友達を対等な立場にある学びのパートナーだと認識しているという、学級の支持的風土の形成が欠かせないということである。前述の意味づけもここに含まれる。第二に、児童に自分の考えを持たせ、表現させる場面を設定することの必要性である。協働的な学びでは、児童と他者の相互作用が重要となってくる。そのためには、自分の考えを持つこと、それを相手へ伝えることが求められる。この二つを授業場面で考えたとき、教師は学年や児童の実態に応じて、“ひとり学び”の指導を工夫したり、話型を示したりといった必要な手立てを講じなければならない。その上でペア学習やグループ学習に臨ませることによって、自分の考えを表現する上での技術を習得していき、自信をつけていくことができると考える。

来年度の実践を見据えた課題としては二つ挙げられる。第一に、教科の選定である。研究内容を授業実践レベルで考えた際、教科の特性を意識した上で授業づくりに臨む必要がある。現在、候補として特別活動と道徳の時間を挙げているが、平成29年度の校内研究で定められた教科に則ってみてはどの助言も受けている。今後、リフレクション等の場で検討し、定めていけたらと考える。第二に、始業前の時間を使って行う活動の内容である。実習では、始業前の学級の時間（15分）を使って、児童同士の関わり合いを促す活動を行ってきた。来年度も引き続き行っていきたいと考えている。来年度の配属学年と、年度初めに行う実態調査の結果に応じて内容を検討していきたい。ただし、4月に関してはA教諭の学級経営の方針に沿った形で内容を組み立てていけたらと考える。

以上の二点と今年度の基盤教育実習における反省を今後の課題とし、来年度の学校課題探究実習に向け、計画的に取り組んでいきたい。